夜な夜な短歌集 第１４巻 2018年 夏号

題「熱」
あなたの熱は、どこにありますか？

横綱はいません

大露羅は二百八十八キロの力士でわたしの五人分です

稀勢の里休場とある新聞で蝿を叩いた午後の眠たさ

リボ払い選べば空は遠のいて金ちゃんヌードル泣きながら食う

ちゃありぃ

短歌を詠んでいる時だけは暑さを感じない。
あとはずっと暑い。ずっと。

温暖化

いまいちばん、SDサイズの冷えピタが欲しい二人で寝るベッドには

冷感の着ぐるみ着せたら寝れるかな横のダンナと距離おく深夜

手違いで高原にでもつながれば、と思っただけよと入るトイレに

七色一味

何が原因かは知らないが、とにかく熱いんだよ！

夏だけど夏だから

適切に冷房をという適切に男女差ありて重ね着をする

シャワーやめ湯船につかり揉みほぐす大胸筋と膝関節を

そういえば刺されていない熱帯夜ひとつくらいは良いこともある

みちくさ

酷暑お見舞い申し上げます

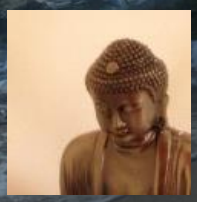
砂浜を掘る

海だっと叫んだ時に窓を見る人がよそ者海までのバス

まだ熱い砂浜を掘るわけもなくいくつもいくつも掘り続けてる

だんだんと熱をおびてく機械たち人は冷たくなって満月

暑い日が続く中熱について考えていたら脳も少しとけました。



ティ

南向き

翳りのないベランダへ向かう指先にサッシが告げる夏の体温

正面から夏を受け止めるコニファーの疲れた背中をシャワーで撫でる

夕空は余熱をまとい一段と焦がれるようにその身を染める

雪（永山　雪）

燦々と降りそそぎリビングを熱する陽射しに疲れ、
淡いブルーの遮光カーテンを買いました。

コンクールの朝

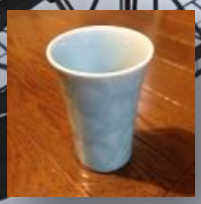
ティンパニをかかえて降りる階段が最初の試練　コンクールの朝

ベルが鳴る　ステージ袖の緊張を呼吸ひとつで集中にする

メロディも伴奏さえも愛おしく一音入魂暑き夏の日

太田青磁（Sage）

熱かった思い出は吹奏楽をやっていた頃だなあと思います。



音が生まれる

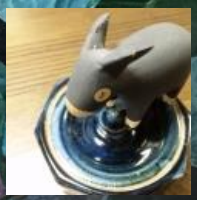
バウロンの刻む鼓動にゆるやかにシンクロしてく夜の幕開け

艶めいたくちびるは言う魂のかけらを紡ぎ歌ができたと

渦を巻く熱を糧にしたくましくやさしくいのち繋がれてゆく

hanak

素朴で、力強くて、美しい。民衆から生まれた音楽に惹かれます。（バウロンは、アイルランドの打楽器）



西へ

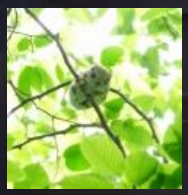
E席でほおづえをつくD席の視線をそっと車窓へ逃す

だだ下がる左座席のエモーション　一センチだけすき間を詰める

期待値を二乗どころか三乗につり上げてゆく琵琶湖の夕陽

momonga（もも）

旅は、発熱のチャンス。



迷い花

身のうちであばれる熱を逃がすため白百合の花手折ってみたく

正しさを見失ってから久しくて胸の微熱を光としてる

血の底がひっくり返る恋をした鼓動が止まるまであと二秒

熱は毒だ。過ぎれば死にも至る毒。でもそんなの全て飲み込んで
山百合のように生きていたいと思うのです。

seri

灼熱の孤独

灼熱の焼ける陽射しのただ中の無防備なの赤い瘢痕

独り寝のうだる暑さの熱帯夜の燻る煙の蚊取り線香

青藍の海の埠頭の明け方の終止告知の夏の子午線

久しぶりに淡々と歌を詠んでしまいました。
夏の暑さを昼、夜、明け方と時間ごとに表現してみました。

masa

微熱

酒気帯びの0時5分のメッセージいつもと違うカタカナ羅列

低音でささやく声はすぐそばで触れられぬひと夢にでてくる

だめだよと応えてほしいわがままをふたつ続けてのみこんだ宙

今年の熱さは歴史に残りそう

June

挿入歌

口唇を掻き分けてくる質量が意外と重くてまだ悩んでる

乱される心の襞の弱いとこあなたじゃなくて誰が探るの

気づくのはいつも全てが終わるころ夏の嵐に持っていかれた

逝れ！

レイ

風待ち

熱の差で生まれた風にざわめいて触れる肩から測れない距離

ため息で微かに風が煽られて心に籠る粗熱をとる

逃げきらぬ熱に溺れて仰ぐ空倦み光る星風を待ってる

「熱」で頭回らずでこんな感じに…
皆様もご自愛くださいませ。

てる

一滴で夏

夕日ってパワーワードがボクたちを燃える恋から帰さずにいる
泣く君ががんばっているパスワードあと一滴で夏が零れる
どこからかプレスト！　の声とんでぱらぱら鳴いて朝の恋人

ふみ

暑い　熱い　あつい　脳みそとけそうです。

著者近影

熱帯植物園・夢の島

てのひらに微熱を集め弾いていた弾けないはずのラヴェルのボレロ

熱帯のゆりかごの中飛べなくて翼をたたむ極楽鳥花

夢を見ることは放熱　煌々と植物園は埋め立て地に建つ

れいぽ

先日熱を出した時に見た夢がモチーフです。
個人的な「熱」ですみません（汗）

熱があるんですが…

寝坊して音速でこぐ自転車よゴールはあれだおはようの顔

猛暑日の太陽の目で見つめるなここんところが焦げてきてるよ

尺玉がどんな大輪咲かそうと浴衣姿がぼくの花火だ

nonたん

最近寝付けなくて、寝たと思ったら同じ夢ばかり見ます。
えっと… 彼女が出てくる夢です…。

編　集　後　記

「暑いですね。」今年の夏、地球上でどれだけこの言葉が交わされたことでしょう。お題を「熱」に決めて良かったのか悪かったのか編集人の私も判断に迷いますが、この夏の暑さはずっと記憶に残りますね。この歌集の歌たちも、その暑さに熱を加えることでしょう。涼しくなるような編集を心がけましたが、それでも歌は熱いですね。

企画・編集・写真　　momonga（もも）

夜な夜な短歌集第14巻2018年夏号／2018年7月発行／企画・編集　momonga（もも）

○当歌集に掲載されている文章・画像等の無断転載はご遠慮下さい。使用する際は、事前に確認していただくようお願いします。歌集の紹介や読書メーターでのレビューは大歓迎です。

○『夜な夜な短歌コミュ』とは、読書メーターにあるコミュニティです。短歌が好き、短歌を詠みたいというメンバーが集まって交流をしています。みなさんも良かったら一緒に短歌を作ってみませんか？

＊夜な夜な短歌人による 夜な夜な短歌コミュをみる